

學界展望

第三一回國際アジア・北アフリカ人
文科學會議(CISHAN)参加記

編輯委員會

第三回の CISHAN は、周知の通り八月三十一日～九月三日に東京、九月五～七日に京都で開催された。世界各国から千八百人近い参加者を迎え、十九の分科會と八つのセミナーなどが行なわれたこの國際會議に、東洋史研究會からも數名の編輯委員が参加した。以下に桃木至朗、佐原康夫、新谷英治の三名の報告を掲げ、會議の内容の一端を紹介する。

八月三十一日午後一時半から國立劇場で開會式が行なわれた。二階席までは満員のホール内には報道陣の姿も目立ち、壇上には正面に名譽總裁の三笠宮崇仁殿下以下の首腦陣、右手に中會根首相ら政府來賓が着席し、最初にメキシコ駐印大使 Dela Lama 氏が挨拶に立ち、以下大會總裁の山本達郎博士、三笠宮殿下、中會根首相ら七人が順に挨拶・祝辭を述べた。續いて歡迎行事として三曲の雅樂の演奏が行なわれたが、外國人のみならず、日頃日本の傳統藝能に親しむ機會の少い我々にとっても非常に興味深いものだった。

開會式終了後、日本都市センターホールで坂本太郎氏の『The Development of Historiography in Japan』と Subhadradis Diskul

氏(タイ)の『Recent Archaeological Discoveries in Thailand』の二つの特別講演が行なわれ、同日夜には赤坂プリンスホテルの「クリスタル・パレス」で三笠宮殿下主催の豪華なレセプションが行なわれるなど、この日は大變盛り澤山なプログラムが組まれていた。

九月二、三日は、上智大學で行なわれた第十八部會『Social Change and Religion in Asia』に参加した。初日はまず招集者の石井米雄教授(京大)が挨拶に立ち、この部會の計畫の基礎に、この春亡くなった鈴木中正教授を中心とする、東・東南アジアにおける『千年王國運動』に関する共同研究(その成果が『千年王國的民衆運動の研究』として公開されたことは記憶に新しい)があり、そこから次第にテーマが擴大して「アジアにおける社會變容と宗教」という大がかりなタイトルになったという計畫の過程を説明し、参加者全員で鈴木教授に默禱をささげた。

次に發表題目を紹介しよう(左記の他に、來場しなかった發表決定者が五人あった)。

(一四)

Thapar, Romila (India) : Millenarianism, Society and Religion in Early India (Keynote Speech)

Mudaliar, Chandra Y. (India) : Political Authority, Religious Institutions and Society

Narayanan, Mutayil, I. (India) : Devotional Movement in Ancient Tamilakam

Champakalakshmi, R. (India) : Religion and Social Change in Tamil Nadu c. A. D. 600-1300

Kartodirdjo, Sartono (Indonesia) : Religious Response to Social

Change in Indonesia

聖地牙哥 (東大) : The Uprising of the Confradia de San

José; A Millenarian Movement in the Nineteenth Century

Philippines

Lubeigt, Guy (France) : Pilgrims and Donations in Buddhist

Monastery of Burma

中東亞 (東大) : Pre-Saya San Pasant Uprisings in Colonial

Burma

Mathur Ramesh (印度) : The Dynamics of Superstitions,
with Special References to India

Gupta, Raghuraj (India) : Changing Status and Role of Muslim

Minority in India : Majority-Minority Tensions and Conflicts
in Uttar Pradesh

Moskalenko, Vladimir N. (USSR) : The Role of Islam in the

Moslem Countries of South Asia (Pakistan and Bangladesh)

Sathe-Anand, Chaivat (Thailand) : Islam and Violence, A Case

Study of Violent Events in the Four Southern Provinces,

Thailand, 1976—81

(川四)

Werblowsky, R. J. Zwi (Israel) : Religion and Social Change
in the Modern Age

李和燦 (中國) : Investigation and Research of the Temple of

Shun-Tian Bao-Ming《順天保明寺》

Shek, Richard (U.S.A.) : The Practices and Aspirations of

Ming-Qing Sectarians

鄭口鐵鐵 (東大) : Revolts and Religious Sects in Chiang-shi

in the End of 19th Century

蔡井泉 (東大) : On the Teachings of Long-Hua-Jing and

Other Bao-juan in Ming Qing Period

饒臣文 (東大) : Identity of Wan Yun Lung, Founder of T'ien-

ti Hui

Mollier, Christine (France) : Demonology and Eschatology in

Early Taoism

島田義 (東大) : Millennialism in Japan's New Religions

加拿大 (Canada) : False Dialectic in a Religious Movement

in Contemporary Japan

Pathak, Sushil Madhaye (India) : Christianity and Christian

Influence in Japan as a Factor of Social Change between 1945

—64.

以上の様に、發表の対象地域はインド、東南アジアから中國、日本まで及び、方法的にも歴史學の他に宗教學、社會學、民俗學などを包含するをわめて幅廣く、野心的な部會だった。その中から東洋史に關係の深い發表に絞って内容を紹介しよう。

基調報告の Taper 氏は、本来ニダヤ教、キリスト教に關して用いられていた千年王國運動の概念が佛教やヒンディー教には缺如している様に見える問題に、本部會の計畫に刺激されて、終末論的觀點、社會的背景などからのアプローチを考えたこと一例えば初期佛教における彌勒信仰などの千年王國的运动—を美しい英語で論じた。二日間を通じて最も多くの聴衆を集めた發表であった。

初日の午前中にはインド人のインドに關する發表が續いたが、その中では Narayan、Champakalakshmi 兩氏が、バラモンの移住や現地指導層のヒンドゥー教受容による非アーリア社會のヒンドゥー化の事例として様々な角度から研究されてきた南インドのタミール社會について、揃って論じたのが興味深かった。兩者ともヒンドゥー化の重要な鍵となった bhakti (devotional movement) に焦點を當て、氏族社會から「封建的な」(Narayan 氏) 農耕社會への發展に寺院經濟が重要な影響を與えたといった、社會經濟的變動まで視野に収めた議論を展開したもので、インド人参加者をまじえたきわめて活潑な討論が行なわれた。東南アジアのインド化(ヒンドゥー化)に重要な役割を果たしたタミール地方の話だけに、石井教授以下主催者側の東南アジア研究者にとっても、興味深い問題が色々含まれていた様である。

初日の午後は主に東南アジアに關する發表が行なわれた。最初の Sartono 氏は、オランダがインドネシアの傳統社會にもたらした社會變容に對する現地の反作用・抵抗の形態として、ラディカルな千年王國的運動やメシアニズム、聖祕主義運動などから、神祕主義運動の如き宗教的復古主義までの様々な宗教的形態が見られたことと、それらの關係、歴史的役割などを論じた。

次の池畑雪浦氏は、この數年間追及して來た『千年王國的民衆運動の研究』所收論文「サン＝ホセ信徒團の反亂」(参照) サン＝ホセ信徒團について、最近現地で蒐集された信者によるタガログ語の記録を活用して分析し、カトリック的文化背景を持つ植民地權力に對する千年王國運動的性格を再確認した。

東南アジアの民衆反亂に關するもう一つの發表をした伊東利勝氏

は、有名なサヤ・サンの反亂に先立つ上ビルマの三つの蜂起をとりあげ、それらの指導者の Setkyamin (universal king) 或いは Min-lanng (future king) としての位置づけから、サヤ・サンに連なる共通の千年王國運動的性格をとり出して見せた。

二日目は中國・日本に關する發表が行なわれた。最初の Werblowsky 氏は、東アジアの近代化における社會變容と宗教との關係を様々な例を擧げて論じた。その中で、日本獨特の家元制度が中國との間で近代化の成否を分ける原因となったとの指摘が筆者には興味深かった。

次に中國の宗教に關する發表が續いた。最初の李世瑜氏の發表(本人が出席せず石井教授が原稿を代讀)は、北京西方の保明寺に關する記録の調査を通じて、明代以降の白蓮宗と大乘教に關する missing link を繋ぐとしたもので、明清時代の寶卷を驅使した詳しい考證が開陳された。

次の Stek 氏は、同じく寶卷を用いて明清代の民間教團(主に黃天道と圓頓教)に見られる非佛教的(道教的)要素について論じた。氏は民間教團即 folk Buddhism と見る通説に反對して、救済觀念、終末觀とメシアニズム、選民思想、母子關係的結合、救済のための技術などの觀點から詳細な論を展開した。

野口鐵郎氏は、太平天國後の江西において、白蓮教の流れを引く紅白黃教などの宗派がもはや純粹な宗教的形態にとどまらず、民衆を政治改革運動、即ち哥老會の如き會黨へと導き入れる入口の役目を果たしたことを述べた。

續く淺井紀氏の發表は、明清代の代表的な寶卷として、清初圓頓教の『龍華經』などをとり上げて分析した。それらに見られる道教

的天地創造説話と阿彌陀、彌勒などの救済信仰が、儒教的支配原理とは全く異なる、民衆の千年王國的運動の源となるものだったことを氏は指摘した。

翁同文氏の發表は、天地會の創立年代と創立者に關するもので、江西貴縣で發見された史料、明末の盧若騰の詩などから、創立者と言われる萬雲龍は高溪長林寺の僧で法名達宗、設立年とされる甲寅年は一六七四年であることを説き明した。

午後の部の最初の Mollier 氏は、初期道教における鬼道の役割を、『太上洞淵神呪經』を題材にして調べ、その起源、ヴァラエティと終末論的役割、惡魔拂いとメシアニズムとの關係などを概括的に論じた。

以上の如く、テーマの多様性と筆者の英語力の貧困とに災いされて、きわめて表面的な紹介しかできなかったが、最後に全體を通じての印象を言えば、この種の大きなテーマを持つ會にしては割合よくまとまっていたと感じた。發表地域によって聴衆が大幅に入れ替わるといった現象は當然見られたものの、タミールのヒンドゥー化、明清の民間宗教などについては、各發表者のテーマが相互に連關を持ち、かみ合った議論が行なわれる場面も多く見られたためである。

(桃木至朗)

セクション 1 前近代の都市

前近代の都市を主題とするこの部會は九月一日から三日まで、赤坂プリンスホテルのクラウン・ルームで開かれた。筆者はこのうち九月二日に行なわれた「中國の歴史的都市」分科會に参加した。

まず、全體の基調報告ともいえる發表をしたのは上海復旦大學の

楊寬氏である。「先秦、秦漢の際の都市布局の發展變化と禮制の關係」と題するこの報告で、楊寬氏は前近代中國の都市プランの變遷を次の三つの時期に區分した。まず第一は先秦から西漢までの時期。この時期に都市は「城」と「郭」を連結した構造となり、宮殿や官署の所在地である「城」が西部あるいは西南部に、居住區・市區である「郭」が東部あるいは東北部に位置する。第二の時期は東漢から隋唐までの時代で、都市は南北を中軸とし、東西に對稱なプランをもつようになる。典型的な例が唐長安城である。そして宋代以降が第三の時期となる。

楊寬氏はこの區分にもとづき、特に第一から第二の時期への變遷を禮制の側面から考察した。氏によれば、古代の禮において家屋の西南角は神靈の宿る「奥」として重んじられていたが、このことが宗廟を政治的中心とした春秋以前の都市プランに反映して、西南部に政治的中心をもつ都市が生まれた。しかし政治の中心が宗廟から宮殿・官署に移るにつれ、南面―北朝の關係が重視されるようになる。この傾向は東漢の洛陽城からはっきりと都市プランに顯われ、唐の長安城に至って完成されたのである。

楊寬氏ならではの廣い視野をもったこの報告は、中國の都市研究にいくつかの新しい視點を提起している。その一つは、從來人工的な城壁にのみ目を奪われがちであった都市プランの研究に、周圍の自然環境―山岳・河川などのいわば天然の城壁―をも考慮する視點を導入したことである。また、宗教的な方向感覺を都市プランの分析に應用する方法は斬新なものといえよう。今後の實證的研究が望まれるテーマである。

二番めの報告は静岡大學の五井直弘氏による「中國古代の都城」

であった。この報告で五井氏は自らの見聞にもとづいて、近年發掘された最古の城壁として河南登封の陽城、同じく淮南平糧臺の城址を紹介し、鄭州の巨大な城壁から戰國期の列國の都城に至る變遷を概観した。都城址の詳細は五井氏の近著『中國古代の城——中國に古代城址を訪ねて』（研文出版、一九八三年九月）を参照されたい。この報告で注目されることは、商代前期の鄭州において城壁の外部にあった手工業作坊が、戰國期にはいずれも城内に集中する、という五井氏の指摘である。都市の經濟的機能の面から都市の歴史的發展を跡づけようとする氏の視點は評價されるべきであらう。ただし鄭州と戰國期都城では時代の開きがありすぎるようにも思われる。さらに詳細な研究が望まれる。

續いて時代は隋唐時代に移り、北海道教育大學の妹尾達彦氏が「長安の都市的社會構造」と題して、すでに楊寬氏も指摘した長安城のシンメトリカルなプランの内部でどのような政治的・經濟的變化が認められるかを考察した報告を行なった。この報告で妹尾氏は、人口の増大などによって城內南部が發展する一方、官廳や官僚の住居の集中する東側の地區が東市を中心としていわば「山の手」を形成し、西市を中心とする地區は外國人居留地などを含む「下町」となっていく、という變化を豊富な圖表を驅使してあとづけた。この報告は直接的には大阪大學における共同研究「唐宋時代の行政・經濟地圖の作成」の成果に基づいているが、『唐代の長安と洛陽』（唐代研究のしおり）以來の精密な研究の蓄積を感じさせる好發表であった。

次なる報告は揚州師範大學の朱江氏による「中世前期揚州城の性格」であった。近年數次にわたって續けられている揚州城の考古學

的發掘データを文獻史料と對照しつつ、朱江氏は揚州城の盛衰を簡潔にまとめた。次第に充實してきた金石資料から、揚州城の坊制や周圍の鄉村の分布にも考察が及ぶなど、從來長安と洛陽に集中しがちだった隋唐の都市研究に新しい對象をもたらしたいといえるだろう。ちなみに揚州城については先秦から宋代に至る長い歴史的發展が確かめられており（紀仲慶「揚州古城址變遷初探」文物一九七九・九）、古代史研究者も注目すべき遺址である。

宋以後の時代については、まず臺北故宮博物院の曾増氏が「開封の城制と金明池」と題する報告を行なった。氏は始めに、度重なる黃河の氾濫で黃土の下に没し去った宋開封城の位置や城内の區畫について初步的な推測を述べ、次いで宋代の繪畫資料に基づいて金明池の風物を詳細に復元した。貴重な繪畫のスライドを數多く紹介しながらのこの報告は、聞き慣れぬ英語にいささか疲れていた筆者には新鮮に感じられた。夙に有名な「清明上河圖」など、都市的景觀をヴィジュアルに確かめることができるのは、他の時代の研究者にとって羨ましいことである。

最後に神戸學院大學の中村哲夫氏が「中國の親族と都市の關係」と題し、錢塘江中流の龍游縣における親族組織の分布についての報告を行なった。氏は民國時代の調査に基づき、龍游縣に住む人々の間で宋代以前に溯る家系はまずないこと、元代ごろに城内にローカルリネージが形成され、明代以降それが城外にも擴大していったことを明らかにした。このことは、都市の歴史において唐宋變革が非常に大きな意義をもつことを傍證するものであり、楊寬氏の立てた第三の時期區分にも相應する。

この分科會に参加して、筆者は異なる時代の都市の研究が、それぞ

れの時代の特色や史料の性格に應じた方法で進められていることを実感した。しかし同時に、中國史上絶えず何らかの形で存在する都市の研究に、例えば楊寬氏に代表されるような時代的視野の廣さが要求されていることも強く印象づけられた。各時代の史料制約が、研究の視野の制限に結果するようなことがあってはならない。その意味で、今回の分科會のように各時代の研究者が互いに刺激しあう機會が今後またたび設けられることを期待する。

セミナーA—3 簡牘研究

九月三日に赤坂剛堂會館で開かれた簡牘研究の分科會は、さながら「雲夢秦簡研究會」の様相を呈した。

まず滋賀大學の永田英正氏は「雲夢秦簡研究に關する所見」と題して、秦簡のもつ意義と、研究上のいくつかの問題點を指摘した。氏によれば、現在發表されている秦簡の釋文の配列と、發掘報告によつて明らかになつた出土時の位置關係が必ずしも對應しておらず、一般に利用されている釋文の配列が唯一の配列方法ではないといえない。出土資料でありながら、出土情況が明らかにならないままに内容の紹介のみが先行してきた感のある雲夢秦簡の研究に、慎重な配慮を促した報告であつた。

次いで名古屋大學の江村治樹氏が「雲夢睡虎地で發見された秦律十八種の性格」と題する報告を行なつた。江村氏は雲夢秦簡の中に見出される「秦律」が縣における行政管理規定を中心としており、商鞅の法に對する追加法と見なされることを明らかにした。縣の吏であつたと思われる人物の墓葬から出土したという事情を合わせ考えれば、雲夢秦簡の利用は居延漢簡などとは異り、特定の目的をも

つて編まれた法律書である、という限定のもとで行なわれるべきであらう。

この二つの報告を總論として、以下の報告は各論にあたる内容をもつていた。杉山明氏は「秦の裁判手續の復元」と題して、秦簡から抽出できる司法上の手續の内容とその手順を明快に整理した。そこから秦代の「裁判」は原告、被告、裁判官が互いに獨立した近代のそれとは異り、國家の司法行政の一環をなすにすぎなかったのではないか、という結論が導かれる。秦代の法を中國法制史の流れの中に位置づけようとする試みとして評價さるべきであらう。

さらに、飯島和俊氏の「戰國秦の非秦人對策」、早稻田大學の工藤元男氏の「雲夢秦簡屬邦律に關連して」という報告があつた。これらの報告はいずれも、雲夢秦簡に顯著にみられる非秦人や少數民族に對する差別と始皇帝の統一、郡縣制の全面施行とがどのような關係をもっているか、という問題意識に基くものである。飯島氏は、贅増に對する政治的差別が三世代後に除かれることに注目し、「客」といわれる非秦人にも同様の差別がなされたと推測した。これは秦の郡縣制がもよからの秦人を中核とし、周圍に「客」を組み込んだことを意味する。そして秦末の反亂は故秦人と新民の對立としてとらえられる。他方工藤氏は、少數民族の統治機構である屬邦が漢代に屬國都尉として郡縣制の中に位置づけられること、また秦簡にみられる少數民族の首長の呼稱が漢の内臣、外臣の區別に展開して行くことを述べた。非秦人や少數民族に對する差別と統合の論理をさぐつた兩氏の報告は、秦簡の發見によつてはじめて到達した研究課題に答へんとするものであり、今後の研究の深化に期待したい。

最後にこの分科會の座長として關西大學の大庭脩氏が「漢簡研究

の「新段階」と題して、近年續々と發見されている漢代木簡資料の性格と意義を概観し、居延・敦煌などの邊境の軍事基地で發見される木簡と内地の墓葬で發見される木簡との性格の相違を踏まえて、漢簡の研究が新たな段階を迎えようとしていることを述べた。

簡牘に限らず、出土資料を歴史研究に利用する場合往々にして、出土資料としての性格をきちんと整理しないままに、知らず識らず都合のよい部分だけをつまみ食いしてしまうことがある。今回のセミナーは我々に、しっかりとした總論に基づく各論の展開の重要さを教えてくれたように思う。出土資料の利用は今日すでに古代史研究の常識であるといっても過言ではないが、問題は單に利用することではなく、いかに利用するかにあるのではないだろうか。

セミナーA—2 考古學的新發見と研究

考古學關係の部會では、九月五日に京都國際會議場で行なわれた「古代の科學技術」分科會で中國を中心とした報告を聞くことができた。

中國社會科學院考古研究所の安志敏氏は杭州灣周邊に分布する最古の稻作文化遺跡として河姆渡文化の概要を紹介した。「河姆渡文化について」と題する流暢な日本語によるこの報告で、安氏は河姆渡で發掘された典型的の耳飾りが日本の縄文文化と共通する一方、中國の新石器文化からは同様の遺物が見出されないことから、稻作文化が長江下流域から日本へ直接もたらされたのではないか、という興味深い假説を述べた。これについては新聞紙上にもとりあげられ、大きな反響を呼んだことは讀者も記憶しておられることとと思う。

次いでコロンビア大學の Brainer 氏が「先秦・漢代の副葬美術と文字資料にみられる儀禮」と題し、馬王堆帛畫と漢墓から發見された帶字陶瓶を用いて當時の葬送儀禮を分析した。帶字陶瓶についてはすでに天師道などの源流としての位置づけがなされ、また馬王堆帛畫の解釋については曾布川寛氏の「崑崙山への昇仙」(中公新書、一九八二)が發表されるなど、このテーマは近年とみに充實してきた分野である。史書に表れることのない古代人の精神世界を解讀することは、正統的歴史記述にのみ依據することの多い歴史家に新鮮な刺激をあたえるだろう。

都市部會で唐揚州城の分析を行なった朱江氏はこの分科會では「揚州出土の唐代三彩陶と三彩瓷」という報告を行なった。近年揚州周邊で數多く發見された三彩の陶器の製作技術の詳細な解説は、科學技術に弱い筆者には難解であつたが、揚州周邊の三彩製造が貿易港としての揚州の盛衰と密接に関連していることはたいへん興味深かつた。

北京大學の鄭衡氏は「鄭亳説について」と題し、鄭州の商代都城遺跡が湯王の都した亳に他ならないとする自説を説いた。これについてはすでにかなり長い間論争されているが、決定的な證據はまだないようである。實際の遺跡を文獻にみえる古地名に比定する研究は、個々の研究者の主観に左右されやすく、客觀的な證據を積み重ねることができにくいのが現状であるように見受けられた。

最後に、セクション17、東南アジア史の部會で發表されるはずだった豫定を變更して、四川大學の童恩正氏が「四川の古代文化と東南アジアの關係」というテーマで報告した。氏によれば、四川にみられる雜穀農耕や崖墓、石板墓、船型棺葬などの文化は東南アジア

のそれらと極めて類似しており、起源と傳播の問題は措くとしても兩者の密接な關係は明らかであるという。巴蜀の地が中國の國家に支配されるようになったのは戰國時代であるから、それ以前の文化については中國という枠にとられない視點が必要なのは言うまでもない。その點で巴蜀史の第一人者である童氏の指摘は説得力があった。

以上、筆者の聞いた限りでも考古學上の最新成果には目を見張る思いであつた。我々が日ごろ「日中の交流」とか「中國と東南アジアの關係」を考える際、現在の國家の枠組を暗黙の前提として考えしてしまうことが多い。しかし考古學の成果はこの前提をすでに確實に乗りこえている。各國の文化が發展した結果「國際」交流が始まるのではなく、廣い交流の中から個性をもった文化が現れてくるのである。歴史家、特に古代史研究者は、自らのもっている常識を再検討してみる必要があるかもしれない。(佐原康夫)

私が參加したのは、第五部會「イスラム宗教運動」(九月一日～三日)、第六部會「アルタイ諸民族の歴史・文化・言語」(九月一日～三日、五日～七日)、第七部會「東西の文化的・經濟的交流——陸上ルートと海上ルート」(九月一日～三日)である。主に參加したのは第六部會であり、第五、第七部會については、それぞれ二、三の發表を聞くことができたに留つた。

オスマン朝史及び十五～十六世紀の地中海史に関心を持つ者のひとりとて、第五、第七部會は、プログラムを見る限り第六部會に劣らず「寶の山」であつた。しかし、國際學會の常かとも思われるが、發表者不參加によるキャンセルが多く、私にとって「おいしい」

發表が少なからず取消しとなつてしまつた。このため、第五、第七部會にはやや足が遠ざかる結果となつた。また九月六日、七日の兩日、第六部會において、ごくささやかなお手傳いをさせて頂いたこともあつて、第六部會への參加が結果的に最も長くなつた。

このような譯で、私のレポートは第六部會を中心としたものとなる。さらにこの部會において、私の個人的關心によつて參加する報告發表の選擇を行つたので、まことに偏りが多く、また未熟な語學力による誤解、知識の不十分さから来る理解不足など、至らぬ點が多數あることと恐れるが、この部會の雰囲気的一端なりともお伝えできればと考え、以下簡單にご紹介してゆきたい。

第六部會は羽田明氏が招集者の任を務め、議長には羽田氏の他服部四郎氏、村山七郎氏、山田信夫氏、佐口透氏、Denis Sinor 氏、James R. Hamilton 氏、Hans R. Roemer 氏ら(順不同)をはじめとする各氏があつた。九月一日～三日は東京會場(日本海運俱樂部二階ホール)で、五日からは京都に會場を移し、同日午後二時からインタナショナル・クリルタイ(Denis Sinor, Walter Hentschel 兩氏の講演及びレセプション、羽田記念館)が催された。翌六日午前に國立京都國際會館で報告發表が行なわれ、同午後には特別講演會(Louis Bazin 氏講演、京大樂友會館)が開かれた。七日午前中の報告發表(國立京都國際會館)をもつてすべての日程を終了した。様々の角度からの多數の報告發表に加え、ふたつの特別プログラムが用意され、本部會は多様かつ充實した内容となつた。

一、報告發表

五日間で合計約五〇件の發表があつた。すべてを紹介することはもとより不可能である。ここでは「歴史」に關するものに限定し、

その中からさらに幾つかをピック・アップした形でお伝えしたい。なお、事前に配布された「研究發表要旨」によって多くを補ったことを告げる。

Louis Bazin 氏は *Correspondants Turco-mongols du français "cheptel de fer"* と題して、ユーラシア大陸の東西に跨る遊牧社會の共通性、あるいは關連性を見出そうとする試みを述べた。

cheptel de fer とは、一旦請負った者に任され、その契約期間が終わると、もとと同數、同質の状態で所有者に返却される家畜群を意味し、一四世紀からフランスで使われているという。

一方ユーラシアの東方、モンゴルのチャハル族においては *gundir mori* (*cheval de fer*) があり、家畜の繁殖を表わし、死んだ家畜の穴埋めに役立つとされていたと言われ、*cheptel de fer* との概念上の一致が見られる。また地理的に中間にあたるオスマン朝には *demir bası* (*tête de fer*) があり、使用後に原狀に復して返却すべき品物、特に家畜、農具を指すという。*bası* が傳統的に家畜を指すことを考えれば、*gundir mori* と同一の概念として捉えられる。

そこで氏は、トルコ・モンゴル社會において *cheptel de fer* にあたるものは古くから共通して存在したと考えられると結論づけ、それではフランスあるいはヨーロッパのこれと同様のものが、共通の起源から來ているのか、單なる借用なのかという問題を提起している。氏の雄大な視點に感心させられる發表であった。(九月二日午後)

羽田明氏は *A propos de la transition de sa à çay* と題して、我

我に大變馴染深い茶に關して日頃の研究の一端を述べた。

中國風の茶を飲み始め、現代チベット語の *sa* から推して、同様の發音で呼ばれていたと考えられる。以後長い間、非漢文史料には茶について述べるものがほとんど見出されないという。

明代に至って、女眞族、ウイグル族、ベルシャ人らは *sa* と發音していたことが確かめられ、清代には、滿洲族、モンゴル族、ベルシャ人、ウイグル族らは *çay* (*caï*) の形を用いていることが知られる。

これらの事柄から、*sa* から *çay* への變化は明代に起こり、清代の初めに完了したとし、また、*çay* は中國語の *chay* (古くは茶の木。明代には葉茶を指すようになった。) に由来すると指摘する。簡潔にして味わいのある發表であった。(九月二日午後)

林俊雄氏は *What is Historical Development in the Nomadic Empire* の標題で、中國の北方に興亡を繰り返した遊牧國家の「發展」について考えている。

氏は先ず、遊牧による生産を不安定かつ制限の多いものと規定し、それ故遊牧帝國の維持・強化には、略奪、交易、農業などが不可欠であるとする。その上で匈奴、突厥、ウイグル、遼における生産と社會構造を分析している。

匈奴は、しばしば漢の領土を侵し、家畜、人間を略奪し、戰時には多くの中國人捕虜を連れ歸った。また自ら匈奴の領内に移り住んだ邊境の中國人もおり、彼らは定住して農業と手工藝に従事した。しかしこの定住生活は、農業に不向きな條件、匈奴の國家自體の崩壊などの理由によって、永續的なものとはならなかった。匈奴のあと、遊牧民にあっては、農業はあまり發達せず、大きな城壁都市は現われなかったという。

しかしウイグルの國家においては著しい變化が現われた。城壁都市の建設、支配層の定住、マニ教の受容、權力の集中化に、前時代までとの相違が見られる。さらに對外政策は、略奪から交易へと變化した。

しかし略奪を止めたことにより農民の供給が止まることとなり、そのため農業地域をその農民と共に自國の中に取り込まなければならなくなった。こうして遂は中國の北部を奪うこととなったというのである。

これらのことにより氏は、ウイグルが部族連合の段階を抜け出して國家としての組織を準備し、遂がそれを完成させたと結論づけている。遊牧國家論に廣い視野からアプローチする興味深い發表であった。(九月三日午前)

Hans R. Roemer 氏 *The Qizilbash Turkomans—Founders and Victims of the Safavid Theocracy* と題し、サファヴィー朝成立前後のトゥルクマン諸族の活動の歴史的な位置づけを試みる。

トゥルクマン諸族の動向に注目した場合、先ずふたつの部族連合國家、即ちカラ・コユンル(東部アナトリア)とアク・コユンル(西北ベルシヤ)の成立が目につく。しかしこれらは共に、國家としては緩く、ぐらつきが多い構造を有し、Ardashir を本據とするスーフィー教團、サファヴィーヤに属することになる。

この教團は、トゥルクマンが流入することにより、軍事的側面も持つようになった。個人としてでなく部族單位で教團に受け入れられたトゥルクマンは、教團の教義と軍事組織という觀念的基盤を得ていった。この過程はカリスマ的指導者 Isma'il と共に頂點に達

し、数々の軍事的勝利ののち、彼は新しいトゥルクマンの國サファヴィー朝の王として即位する。

この國は安定性と永續性の點でこれまでのトゥルクマン諸國家とは異なり、教團組織、軍事組織、官僚組織によって、部族主義が押え込まれた。部族間の確執によりその統治力が危機に瀕した時、Shah 'Abbas 一世は逆に諸部族の力を打ち碎き、その軍事力獨占を奪った。

このような議論の展開により氏は、サファヴィー朝においてかつての連合的國家は、絶對的かつ中央集權化された國家へと變化し、トゥルクマンは先祖たちがたてた神政國家の犠牲となった、と結論づける。トゥルクマンと國家、あるいは廣く遊牧民と國家について考える場合、示唆に富む發表である。(九月七日午前)

さて多數の興味深い發表の紹介を残したままであるが、與えられた紙幅の制限もあるので、特別プログラムの紹介に移りたい。

二、特別プログラム

(一) インターナショナル・クリルタイ

九月五日午後二時から京都大學文學部羽田記念館(京都市北區大宮)において、Denis Sinor 氏、Walter Hoesig 氏の講演及びレセプションが行なわれた。

この講演會は、毎年春と秋に催されている羽田記念館講演會の、第八回定例會を兼ねたものである。今回 Sinor 氏及び Hoesig 氏の協力と關係方面の理解により、第六部會の一環として、文字通り國際的な交流の場を提供することになった。参加者は七〇名を超えた。

Sinor 氏は *Altai Studies in the United States* と題し、アメ

リカ合衆國におけるアルタイ學の現状を、氏の個人的體驗も織り交ぜながら語った。また Heising 氏は Historical Reality on Oral Tradition をテーマに、歴史學と口承傳承の關わり方について述べた。

講演のあと、服部四郎氏に PLAC (國際アルタイ學者會議) がその功績を讀えて記念のメダルを贈ることが發表され、満場の拍手の中、Sinor 氏から服部氏に手渡された。

このあとレセプションに移り、内外の研究者の交歓が行なわれた。

(二) 特別講演會

九月六日午後四時から京大樂友會館 (京都市左京區近衛) において、Louis Bazin 氏の講演會が行なわれた。Un concept chamannique : *altaïque* *sur "force psychique" と題して、アルタイ系の言語に廣く見られ、「靈力」をあらわすとされる *sur/sur* なる言葉を取り上げ、多角的に分析した。本講演では濱田正美氏による通譯が行なわれた。参加者は約五〇名であった。

まことに簡略で不十分なものであるが、以上で第六部會の紹介を終わらせて頂き、最後に閉會式の模様をお傳えしておきたい。

閉會式は九月七日午後二時から國立京都國際會館メインホールにおいて行なわれた。

先ず事務當局から今回の大會全體の事務的な報告があり、總數一、八三七名 (海外から七〇七名、日本から一、一三〇名) の参加

があったことなどが報告された。

續いて山本達郎會長から會議の名稱變更、開催間隔の明確化などの提案があり、その場の議決により次回 (三三回) 大會から International Congress for Asian and African Studies と稱し、今後開催間隔は五年を超えないこととする、などが決定された。

また次回大會は一九八六年八月〜九月にドイツのハンブルクで開かれることとなった。これをうけて、西ドイツオリエント學會會長 Hans R. Roemer 氏が挨拶し、西ドイツがこの會議を歓迎することを述べ、あわせてハンブルク大會への各方面の協力を要請した。

このあと挨拶に立ったインドの R. N. Dandekar 氏は、もはや東洋學はヨーロッパ人の專賣ではないと訴え、アジア、アフリカの東洋學者の今後の責任と義務を強調した。さらに A. M. Basham 氏らの挨拶、山本會長の締め括りの言葉のあと、三笠宮崇仁親王の閉會の辭をもって七日間の大會の幕を閉じた。

なお閉會式終了後同會館内で、貝塚茂樹氏の招待による Fairwell Party が催された。参加者は和やかなうちに最後の交流のひとつきを過ごした。

(附記)

一六頁で紹介した童恩正氏の報告は、『文物』一九八三年第九期に「試談古代四川與東南亞文明的關係」と題する論考として發表された。就いて見られたい。